令和5年度　大田区立羽田小学校　自己評価　報告書

令和5年5月16日

○　本校の概要

「児童数273、学級数11、教員数20名、今年度開校120周年を迎える地域に密着した学校である。通年、地元の祭りや伝統的な行事への参加をはじめ、干潟観察や豊の授業など、地域の方々と学校が一体となって子どもたちの健全育成に取り組んでいる。また、羽田空港に最も近い学校であり、総合的な学習の時間を用いたバリアフリーの学習やキャリア教育、空港イベントへの参加等、空港と日常的に連携を図り、学校教育に生かしている。また、東京都人権尊重教育推進校としての歴史は長く、近隣の高齢者団体や幼・保育園、障害者施設や食肉市場の方々との交流を通して、都の人権課題について積極的に学習に取り組んでいる。このように、本校は「地域力と国際都市おおた」の実践に意欲的に取り組み、「人権尊重教育」に力を注いでいる学校である。
　また、学力向上においては、放課後補習教室や土曜補習教室（羽ばっす塾）などを利用し、日頃の学習の成果や学習効果測定などの結果を基に、全教員が力を合わせて指導に当たっている。漢字検定では全ての児童が合格するまで指導し、学力効果測定の結果にもその成果が見られるようになってきている。

○　自己評価及び学校関係者評価の結果の概要と改善策

大項目	目標	取組内容	取組指標	取組評価	目標に対する成果指標		成果評価	これまでの取組 今後の改善策	学校関係者記入欄 評価	人数	コメント
プラン1　未来社会を創造的に生きる子供の育成	コミュニケーション能力、情報活用能力、ともに生きる力等、これからの社会の変化にしなやかに対応する子どもの力と自信を身に付けます。	外国語教育指導員を効果的に活用し、外国の方々とのコミュニケーション能力の育成等を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	4	「自分の考えや感じたことを友達に言葉で伝えることができる」と回答した子どもの割合	4: 80%以上 3: 70%以上 2: 60%以上 1: 60%未満	4	校内研究では、話し合い活動を通して自身の表現力を伸ばすと共に、相手の考えを聞いて考えを深める取組を行っている。各教科では、話し合いをさせるために、二人一組に考えを与えた上で、話し合う活動に取り組ませている。 今後も、話し合う活動に重点を置くと共に、「おおたの未来づくり」の教科化に向けて、1年生の段階から、地域創生（羽田の祭り・防災）、ものづくり（羽田空港との連携）の活動の経験を積み上げるカリキュラムを作成し、実施していく。	A	9	授業の中で児童が自分の考えや感じたことを発言でき、理解してもらえる環境づくりができていると感じる。大人とも子どもとも、互いの差異を尊重し合える土壌があって、はじめて自分の思いを伝えられるものだと思うので、その土台を学級や学校内でくりあげていただきたい。 　体験学習が増えたことにより、大人と会話することも多くなったが、敬語を上手に使っていた。時々言葉の使い方を間違えることがあっても、その場で正しい言葉を指導してくれていたので、とても大切なことだと感じた。 　また、言葉にすることだけではなく、遊びの参加、チームワーク、他の友達への共感などを含めてコミュニケーション能力であるという視点で考えると、アンケート結果の評価と目標が合致している。 　羽田は地域にめぐまれているので、これからの社会に対応する創造的な資質・能力を育む「おおたの未来づくり」の取組には期待している。SNS等のデジタル表情報発信ツールの発達、社会の多様化、国際化など、様々な背景から今後一人ひとりの情報発信力がさらに重要になってくる。子どもたちの個々のコミュニケーション能力向上のための取組が行われたことを高く評価するとともに、これからも継続して行われることを望む。
		論理的、科学的な思考力の育成を目指し、「おおたのものづくり」を生かした体験活動や理数授業等を実施する。	4：全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	4					B	2	
		学力の定着と学ぶ意欲の伸長を目指し、ICT機器を活用した授業を実施する。	4：設置教室を使用する全正規教員が週1回以上活用した。 3:80%以上の正規教員が週1回以上活用した。 2:60%以上の正規教員が週1回以上活用した。 1:60%未満であった。	4					C	0	
		他者の人権を尊重する人権教育の推進を目指し、人権教育資料等を活用した授業を実施する。	4：対象となる全学級（全教員）で行った。 3:80%以上で行った。 2:60%以上で行った。 1:60%未満であった。	4					D	0	
		体力テストの結果を踏まえ体力向上全体計画を作成し、計画に基づいた体育指導や「一校一取組」運動や「一学級一実践」運動を実践する。	4：全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4							
		授業の中で、児童が自分の思いや考えをもつことができ、表現できる場をつくる。	4：「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4							
プラン2　学力の向上	児童・生徒一人ひとりの学ぶ意欲を高め、確かな学力を定着させます。	学習カルテを基に児童・生徒と面談し、一人ひとりの学習のつまずきや学習方法について、指導する。	4：対象となる全学級（全教員）で行った。 3:80%以上で行った。 2:60%以上で行った。 1:60%未満であった。	4	東京ベーシックドリルにおいて、1学期から3学期の平均正答率の上昇のポイント	4: 5P以上 3: 3P以上 2: 同等以上 1: 同等未満	4	算数のステップ学習では、タブレットを活用したことで、習熟状況を教員が容易に把握することができた。 今後も少人数できめ細かな指導を行い、児童の課題を詳細に把握して習熟度を上げていく。 学習補助員による、放課後等の補充学習は、きめ細かく児童の様子を把握することができ、有効であった。	A	6	平均正答率5．4ポイントの上昇は素晴らしい成果だと思う。教員・学習指導員が寄り添ってきめ細かく指導することは、子どもたちの学習意欲を高めると思うので、引き続きお願いしたい。 一方で、学力の向上はまだまだ見えていないと感じる。平均正答率に差目するよりも、二極化している低級下位層への支援に注力することも必要。成果指標を決めるプロセスで、「過去の推移」「他校との比較」など、羽田小学校独自の強みや弱みを把握したうえで、今後はちポイントの成果指標が適切なのかが検討課題になると考える。
		算数・数学到達度をステップ学習チェックシートで児童・生徒、保護者に知らせる。	4:学期に2～3回知らせた。 3:学期毎に知らせた。 2:年度間に1回は知らせた。 1:お知らせできなかった。	3		3: 3P以上 2: 同等以上 1: 同等未満			B	4	
		学習補助員等による算数・数学・英語の補習を実施する。	4：対象児童・生徒への出席を全教員が働きかけた。 3:80%以上の教員が働きかけた。 2:60%以上の教員が働きかけた。 1:60%以下の教員が働きかけた。	4					C	1	
		授業改善推進プランを、授業に生かす。	4：「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	4					D	0	
		週に一度以上は、問題解決的な学習を取り入れた授業を行い、児童の能力の向上を図っている。	4：「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	3							
プラン3　豊かな心の育成	子ども一人ひとりの正義感や自己肯定感、自己有用感などを高めるとともに、自他の生命を尊重する心を育成するなど、未来への希望に満ちた豊かな心をはぐくみます。	小中一貫による教育の視点に立った生活指導の充実により、社会のルールや学校のきまりなどを守ろうとする意識を高める。	4：全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	4	「自分にはよいところがある」と思うと回答した子どもの割合	4: 90%以上 3: 85%以上 2: 80%以上 1: 80%未満	3	東京都人権尊重教育推進校として、校内研究では「聞かり合い、認め合い、未来を拓く子供の育成」～自分も相手も大切にする言語能力を育成するための指導の工夫～を行ってきた。 その中で、教員が適切に認めて即時評価することで、どの子も自信をもって意見を言える環境を作ることができ、児童の自己肯定感を高めることができた。 今後も児童が主体的に発言したり話し合ったりして、互いに認め合いながら、日常生活でも言葉を大事にして自分も相手も尊重できるような指導を継続していく。	A	8	人権アンケートの「自分には良いところがある」88%、「友達のことを大切にして、生活や勉強をしている」94%は、人権教育の成果であり、人権尊重教育推進校としての環境が、多いに力になっていると思う。児童間のトラブルやもめごと等、学校と先生方の迅速な対応がたくさん見られた1年たった。子どもたちの会話からも、自己肯定感がとがっていると感じている。自己肯定感や自己有用感はなりの大きな財産になる。幼少期から養われた尊感情を基とする「プライド」を心の中にも も続けなければ、子どもたちが将来属する様々な組織、他者との関係性のなかで生き延びていくことが難しい時代だと思う。期間に流されることなく、自己を確立する機会が小学校生活の中に設けられていることを高く評価する。今後は、不登校やいじめ等も「家にみていく必要があり、日本人が苦手な分野である自己肯定感が、評価指標として適切であるかは検討が必要である。 　また、羽小スタンダードや生活指導だよりの放課後の遊び方、登下校の安全など、明文化されているのが良いと思う。社会にはもっとたくさんのルールがある。分かりやすく明文化することで、幼い頃からルールを守る大切さが身に付くと思う。
		道徳教育推進教師を講師とした研修や、国、都及び区の資料を活用した授業等を行う等道徳指導充実のための取組を行う。	4：学期に2～3回（年間5回）以上行った。 3:学期に1回（年間3回）以上行った。 2:年度間に1回以上行った。 1:実施しなかった。	4					B	3	
		学校生活調査（メンタルヘルスチェック）の結果よりストレス症状のみられる児童・生徒に対して組織的に対応する。	4：「組織的対応ができた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4					C	0	
		学校いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止、早期発見等のための取組を実施する。	4：「組織的対応ができた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4					D	0	
		問題行動・不登校問題等にかかわる児童・生徒に関するケース会議等を実施する。	4：必要な事案に対して必ず会議を実施し、組織的に対応した。 3:必要な事案に対しておおかた会議を実施した。 2:必要な事案に対してあまり会議を実施しなかった。 1:必要な事案に対してほとんど会議を実施せず、組織的な対応をしなかった。	4							
		児童が自主的に、実践的に取り組める活動（学級活動、係活動、児童会活動等）の場を作り、その成果を的確に評価している。	4：全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4							
プラン4　体力増進の向上と健康	スポーツに親しむ心の育成や、運動習慣の定着による体力向上など、生涯にわたって健康増進を図る意識の向上をめざします。	「早寝・早起き・朝ごはん」月間の取組等を通して、児童・生徒や保護者に対し、望ましい生活習慣についての意識啓発を行う。	4：全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4	週に3回以上外遊びをし、進んで体を動かした児童の割合	4: 90%以上 3: 80%以上 2: 70%以上 1: 70%未満	3	年間を通して計画的にワンアップタイムを行い、中休みの時間にリズム縄跳び、マラソン、大縄タイムを実施し、跳力や持久力の向上に努めた。 外遊びを呼びかけているため、元気に体を動かす児童が多くいるが、遊びの内容が固定化していたため、今後もより多くの児童が外に出る機会が増えるように、運動委員会等で遊びの提案を企画していく。	A	9	休み時間の校庭は元気なそどもたちであふれており、先生方も一緒に遊んでいるのが良い。身体の育成、適度な運動、陽の下で体を動かすことも心身のバランスに結びつくと思うので、ワンアップタイムは大切な取組だと認識している。集団での達成感を取り入れることは非常に有効（効果的）だが、運動が苦手な児童の場合、逆にプレッシャーになってしまうので、個人としての伸びを実感できる活動であると良い。運動委員会での遊びの企画提案は、子どもの目線での発想が生まれるため、教育として良いことだと思う。 　部活動の外部委託の流れにもみられるように、教員が教科学習以外の領域をどこまで負担するべきかは議論があると思う。成果評価の通りに多くの子どもたちが体を動かすきっかけになっているのであれば、有効な取組が行われたと評価できる。今後は夏ワクで講師をしてくれた団体から、体を動かす遊びのアイディアをもらうことも良いと思う。 　成果指標については、中休みの活動で体力がつくほどの運動をしているかは不明であり、図書室を利用する児童もいる。教員の肌感覚の割合だと、指標の妥当性の判断が難しいため、検討が必要である。
		体育的行事、部活動、休み時間など様々な機会を通して運動習慣の確立を推進する。	4：全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4					B	2	
		体育の授業や外遊びを通して、体力向上や運動能力の向上を図る運動の取り組みを継続的に推進する。	4：全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4					C	0	
プラン5　魅力ある教育環境づくり	児童・生徒が安全・安心に学校生活を送るために、教員の指導力向上と良質な教育環境をつくります。	授業公開日の授業評価を、その後の授業改善に生かす。	4：「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4	教員は子どもたちに目標をもたせ、その「めざす自分」に向かって努力できるようにしている、と回答した保護者の割合	4: 80%以上 3: 70%以上 2: 60%以上 1: 60%未満	3	キャリアパスポートでは、学期や行事ごとに児童の発達段階に考慮した目標を考えさせ、振り返り形行わせることで、児童がめざす自分にどれだけ近付けたのかを考えさせることができた。また、各学期末には、保護者に内容の確認をしてもらい、学校と家庭が連携して、子どもたちの努力に対する適切な評価を行うことができた。 　キャリアパスポートは、小学校だけでなく中学校、高等学校までつながるものなので、児童が継続的に自己評価と家庭・学校からの評価により、自分の目標に向かって努力できるようにしていく。 　また、「ランフェス」では、オリンピックアスリートから走り方を教わり、人と競うのではなく、自分の記録を更新することで価値付けて、約1か月の練習を経て行うことができた。自分の記録の伸びを表した記録証を交付することで、児童の努力を家庭に伝えることもできた。	A	8	家庭との連携を積極的に行おうとする姿勢は評価できる。キャリアパスポートは学校と家庭の連携がとても大切だと感じた。先生や家庭からの評価（励まし）は、子どもたちにとって努力する糧になると思う。 　成果指標である保護者アンケートの回収率が低く、「目指す自分に向かって・・・」の問いに対して、「わからない」の回答が多い。キャリアパスポートを活用した指導について、保護者に丁寧な説明をお願いしたい。ただ、問いが抽象的な内容だけに、先生との相性で判断されかねないため、78%でも高いレベルであるように思う。 　キャリアパスポートに対しては、小学生段階ではいわゆる「良いこと」を育てるため、または優等生でない子にとっては様々な取り組まざるを得ないツール（特に各チェック項目）のような印象をもっていたが、学校と家庭の連携を図るためには有用な面があるのかと思いをあらためたにした。上記「学力」の項目と同様だが、「目標をもてない」「目ざす自分に向かって努力できない」子どもにも存在価値があることに着目した指導が忘れ去られないことを望む。
		各種研究発表会等の研究・研修の成果を、自身の授業改善に生かす。	4：「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4					B	3	
		校内委員会等を確実に実施し、学校における特別支援教育を推進する。	4：月1回以上行った。 3:学期に2～3回行った。 2:学期1回以上行った。 1:実施しなかった。	4					C	0	
		自身の課題を明確にして公開授業や自己申告改善授業に取り組み、授業改善を図る。	4：「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4					D	0	
プラン6　学校・家庭・地域が一体となって進める教育	学校・家庭・地域が担う役割などを明確にし、地域に開かれた教育の実現を目指します。また、相互の連携を深め、子どもを育てる仕組みを作ります。	教育目標・学校経営方針・学校評価等の基本情報、児童・生徒の活動情報等をホームページ等で公開及び更新することにより、積極的に情報を発信する。	4:月1回以上更新した。 3:学期に2～3回更新した。 2:学期1回以上更新した。 1:更新しなかった。	4	「家庭では子どもに挨拶や返事をしっかりさせている」と回答した保護者の割合	4: 90%以上 3: 80%以上 2: 70%以上 1: 70%未満	4	校内、校外に関わらず、地域の方にも積極的に挨拶を行うように指導を行った。 今後も標語として「羽小はこころのオ・ア・シ・ス・さ」を活用し、地域と連携しながら指導を行っていく。 9月からコミュニティ・スクールを導入し、学校運営協議会で、どのような子供をどのように育てていくかという、地域が一体となって子供を育てることについて協議することができた。3学期以降は「羽田CS見守り隊」として、登下校の見守りや挨拶を保護者・地域に呼び掛ける。今後も学校・家庭・地域が連携を図り、皆で子どもたちに挨拶の大切さを伝えていく。	A	9	コミュニティスクールの導入により、地域と学校の一体化をいろいろな場面で感じている。地域との連携が非常に大きであるのは羽小の誇るべき点である。今年度は地域や保護者の方が授業サポートや講師、遠足の引率見守りサポート、夏ワクの講師など子どもたちに関わってくれた。「読み聞かせ市ラ・ディ」「月の会」も保護者と地域の方で再開することができた。サポートの必要を学校から伝えてもらえることもあかった。PTA活動も先進的であり、こうした家庭・地域との連携がいかに子どもの教育活動に還元されるかを注意深く見守っていきたい。 　朝の学校は、先生たちの「おはよう」の声と笑顔で迎えてくれている。指導だけでなく、こうした大人の挨拶や関わりによって「あいさつの大切さ」が子どもたちに伝わっていると感じる。体感としては、子どもたちは自分の知っている人には挨拶をする傾向がある。礼節と規律を身につける環境作りは大切なことと認識している。引き続き、児童のみならず保護者への啓蒙は必要だと感じる。 　成果指標である保護者アンケートの「地域の力・・・」に「よくわからない」の回答が多い。保護者に周知する方法について地域の一人として学校と協働して工夫していきたい。また、保護者アンケートの92%と子どもアンケートの回答86%の乖離が気になる。目標に対する成果指標は高く、その点で高評価とするが、多少予定調和的な目標設定になっていると感じる。私も地域の一員として役割の一端を担えればと思うが、「地域」自体は閉塞性、同調性もあり、子どもたちの自由で伸びやかな成長の足かせにならないよう留意することも必要だと感じる。
		地域教育連絡協議会において、児童・生徒の変容等の具体的な資料を作成して、評価に必要な学校の情報を適切に提供し、適正な評価を受けるよう努める。	4：毎回情報を提供した。 3:おおむね情報を提供した。 2:あまり情報を提供しなかった。 1:情報を提供しなかった。	3					B	2	
		学校支援地域本部と連携するなどして、地域力を生かした特色ある教育活動を実践する。	4：学期に2～3回行った。 3:学期1回以上行った。 2:年1回以上行った。 1:実施しなかった。	4					C	0	
		児童の「わかる」「できる」につながる家庭学習を定期的に出し、習慣化を図る。	4：「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4					D	0	
		自ら挨拶しようとする児童の意識を高める取り組みをして、自分から進んで挨拶する児童を増やす。	4：「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4							

○「成果評価」は、各校が4段階で定めた成果指標によって行う。
○記入にあたっては、各学校で取り組んでいる自己評価項目に照らし、該当する項目を取りまとめて行う。
○学校関係者評価の「評価」は、A：自己評価は適切である　B：自己評価はおおむね適切である　C：自己評価は適切ではない　D：評価は不可能である　の4点について、評価した人数を記載する。